

## 戦国時代趙の研究の課題について

— 武霊王の時代にスポットをあてて —

— 瀬 裕 之

### 1. 時代選択の理由

筆者は、戦国時代の趙について特に武霊王（紀元前325～299の27年間在位）の時代についてスポットをあて、国家の性格と近隣諸侯との関係を明らかにしていきたいと考えている。武霊王の時代に主眼をおく理由は、『史記』趙世家の中で、35節から55節にまたがる最も長い部分で、その内容も、国政に関する事項、韓・魏・秦など他の戦国七雄との関係、中山国との抗争、胡服採用に関する論議など豊富であり、趙の国家を考える上でポイントとなる時代であると考えからである。

また、武霊王は、その19年（前307年）に胡服を採用し、20年（前306年）には、中山国を攻略し、遠くは榆中まで軍を進めた。一方では、樓緩を秦へ、仇液を韓へ、王賁を楚へ、富丁を魏へ、趙爵を齊へ派遣してその成功を告げさせるなど、六国への外交も万全であった。21年（前305年）には、上中下の三軍を編成し、王自らこれに将として中山を攻撃し、26年（前300年）には遠く西北方の雲中・九原まで進征した。まさに、趙の盛時、開花の時代というべきで、国力が充実し、勢力範囲の面でも最も広く、外交の面でも隙が感じられないこの時代にスポットをあてることは、趙の国家を考えるうえで重要であると考えからである。

もう一点の理由として、『史記』趙世家全体を見たとき、武霊王から恵文王へと移り変わる時期を転機として、それまでは基本的には隆盛していた趙が、衰退へと向かうようになる。武霊王の時代は、最も盛えたひとつの山が、下りへと向かうというひとつの大きな流れのターニングポイントになっており、趙の歴史全体を考えるうえでも、注目すべき時代であると考えたからである。

趙が衰退へ向かうようになったのは、他国の干渉といったことではなく、国内の失策によるところが大きかった。ターニングポイントである武霊王の時代以降の趙の歴史をみるとそれがよくわかる。武霊王は即位して27年（前299年）に、位を恵文王に譲り自らは主父と号した。かくて西方の強秦をして恐怖せしめ、趙の最盛時を現出し、勢力も最も強大となった。主父が死に、恵文王の時代になると、西方の秦、北方の燕、東南方の齊・韓・魏との折衝はいよいよ急を告げた。ついで孝成王が立つと、上党の帰属や、秦との攻争和平に関して、趙奢、趙豹、趙勝らの異論が激しさを加え、廉頗や趙括らの任免をめぐる、反問・讒言が錯誤し、趙の社稷は頓に傾き、ついに秦に滅ぼされた。紀元前228年のことである。蘇轍はこれを論じて次のように述べた

。「趙は戦国に於いて強し。大失計に非ざれば、未だ遽かに亡びざるなり。孝成王上党の利を貪りて、趙豹に聴かずして趙勝に聴き、以て秦の怒りを致す。一失なり。廉頗をして秦を長平に拒がしめ、秦の間に聴き、趙括をして頗に代わらしむ。再失なり。趙括既に破れ、邯鄲囲まる。虞卿請ふ。「重宝を以て楚・魏に附し、援国を以て秦に示さば、秦の媾得べし。」と。王、用うる能はずして趙豹に聴き、鄭朱を秦に入れて媾を求めしむ。諸侯此れに由りて肯へて趙を救ふなし。三失なり。此れに由りて此れを観るに、秦独り能く趙を破るのみに非ず。趙の自ら敗る所以のもの多し。」（蘇轍、『古史』巻5、四庫全書史部129所収）

## 2. 戦国時代史研究の動向

戦国時代、とりわけ春秋時代から戦国時代にかけての時期を中国史における一大転換期とみなすことは、今日の学会の共通認識となっている。ただし、この転換期をいかなる性質のものともみなすかについてはさまざまな見解がある。中国においては、1950年代、中国史における奴隷制的社会と封建領主的社会的分岐点をどの時代におくかという、いわゆる古代史分岐論争が展開したが、転換期としてのこの時代の理解に対しても大きな差異があらわれている。戦国時代を転換期として最も重視するのは郭沫若氏に代表される戦国封建制説であり、春秋・戦国の交を奴隷制から封建制への転換期そのものとみなす。この他に、春秋・戦国時代をともに封建制社会としてはいるが、この両時代の交を領主制から地主制へというやはり転換期としてとらえている范文瀾氏を代表とする西周封建制説、漢代までを奴隷制社会とみなす童書業氏、王仲孺氏、何茲全氏等の魏晉封建制説などがあつた。ところが1950年代末から60年代になると、以上のような分岐論争は収束へ向かい、郭氏の説が学界の主流となつた。この傾向は、文化大革命中も変わらずほぼ定説化していったが、1976年、いわゆる「四人組」が追放されると、再び古代史分岐問題に関する討論が活発となつてきた。1978年、長春で開催された古代史分岐討論会では、ほぼ六種の学説（西周・春秋・戦国・秦統一・後漢・魏晉の各封建制説）が出されている（『歴史研究』1978-12）。

中国の古代史研究は、分岐問題を中心に展開してきたが、日本においてはこの問題をも常に内包しながら、中国史上最初の専制主義国家である秦漢統一帝国をいかに把握するかということが重要な課題であつたといつても過言ではない。したがって、戦国時代は中国史上の転換期とする共通認識のもとに、秦漢帝国形成期として考察の対象となつてきた。西嶋定生氏の「中国古代帝国の成立の一考察」（『歴史学研究』141,1949年）は、古代史研究の方向づけを行なつた論文である。氏は、春秋・戦国の変動期を、氏族制的邑共同体の分解によって家父長的な家内奴隷制的豪族集団が発生してくる時代ととらえ、このような集団が専制主義的な漢帝国の権力構造の性格を規定するとした。増淵龍夫氏は、『中国古代の社会と国家』（弘文堂、1960年）所収論

文で、氏族制的秩序の解体から出現する新しい民間集団を家父長的な任侠的集団としてとらえた。そして、このような集団に体现される新秩序は政治秩序をも規定していると考え、戦国時代に遡って任侠的集団と家産的専制国家権力との関係を追求め、さらにその国家権力自体を支える経済基盤をも明らかにしようとした。

1950年代末から1960年代にかけて、西嶋定生氏は、『中国古代帝国の形成と構造』（東京大学出版会、1961年）において、増淵龍夫氏の見解を批判して、国家権力を君主（皇帝）と人民との関係でとらえるべきことを主張し、皇帝による人民の個人的人身的支配は、氏族制的秩序崩壊後に出現する自律的機能を失った里的秩序を場として、上からの爵制的秩序を介して実現されるとした。それに対し、増淵龍夫氏は、「所謂東洋的専制主義と共同体」（『一橋論叢』47-3、1962年）において、西嶋定生氏の新説を批判し、里的秩序を土豪・豪族の維持する自律的秩序として下から国家を支えるものとしてとらえ、さらに専制支配という概念そのものの再検討を求めた。それに対し、宇都宮清吉氏は、「管子弟子職篇によせて」（『中国古代中世史研究』第5章）において、氏族制的秩序解体後に出現する人間関係を、強権による「首領制」と自然な家族的関係に基づく「家族制」という二つの類型にわけ、この矛盾的相互媒介のなかで個人から国家までを考えるべきであるとし、先の二人の方向の統合をはかりながら新しい方向を模索した。

1960年代後半以後になると、秦漢古代帝国に関する構造論的研究は、以上の三氏の方法を見据えながら、とくに個別的人身的支配（皇帝支配）と自律的秩序（共同体）の問題を中心に、君主（皇帝）、豪族、小農民の関係をいかに把握すべきかという形で展開している。

戦国時代に限定した場合1970年後半以後になると、地域差を考慮に入れた研究が顕著になってきている。近年は、東方六国と秦との対比のうえで秦漢帝国の形成を考えようとする傾向が目される。秦に関する研究については商鞅変法の研究を中心に歴大な蓄積がある。太田幸男氏の「商鞅変法の再検討」（『歴史学研究別冊特集』1975年）や、千葉茂雄氏の「商鞅変法研究史小論」（『史潮』200、1967年）、古賀登氏の『漢長安城と阡陌・県郷亭里制度』（雄山閣、1980年）や、好並隆司「中国における皇帝権の成立と展開」（『思想』1978年2月号）などがその例である。

これに対して秦漢帝国に直接接続せず、また文献史料の乏しい東方六国の国家性格を問題とする研究はあまり盛んとはいえない。斉の田氏については、太田幸男氏の「斉の田氏について」（『歴史学研究』350、1969年）など一連の研究があり、魏については、好並隆司氏の「戦国魏政権の派閥構造」（『東洋学報』60-3,4、1979年）、楚については、宇都木章氏の「戦国時代楚の世族」（『中国古代の社会と文化』東京大学出版会1957年）や、岡田功氏の「楚国と呉起変法」（『歴史学研究』490、1981年）などの研究があるが、趙の国や、この他の諸国についての専論はほとんどないに等しい。

### 3. 戦国時代趙の研究の課題

戦国時代の趙に関する専論は、上述のように、ほとんどないに等しい。そこで、趙について研究するには、まず、文献史料の整理が必要であろう。しかし、ここで考慮に入れておかなければならない問題として、戦国史資料の偏在と、信頼性の疑問という史料的制約があげられる。戦国史研究の基本史料となる『史記』では、『秦記』以外の他の戦国諸国の記録が焚書によって失われたといわれており、また『史記』における年代の不一致や、歴史故事の信頼性も問題となっている。さらに『史記』以外の戦国史資料についても、『戦國策』や『世本』、『竹書紀年』のように、伝本過程と史料的信頼性が問題となっている。よって、戦国時代の趙の研究を行なう場合、まず『史記』をはじめとする戦国史資料の史料的性格や、史料間の編年・整理の問題を考察しておく必要があるだろう。

このような研究については、藤田勝久氏の一連の研究がある。まず、藤田氏は、『史記』六国年表と趙世家の戦国紀年について、「『史記』戦国紀年の再検討—睡虎地秦簡『編年記』をてがかりとして—」（愛媛大学教養部紀要、第XX号、1987年）において、次のように述べている。「趙世家の戦国紀年は、六国趙表の戦国紀年とはかなり異なっている。両者を比べると次のような特徴が見出させる。まず六国趙表では武靈王25年、恵文王元年、2年の記事しかないのに対して、趙世家では武靈王22年、24年、恵文王元年をのぞいてはほぼ毎年のように記事がある。しかも両者は、武靈王25年の「恵后卒」のように共通する記事もみられるが、恵文王2年の条のように異なる記事がある。また趙世家の記事内容をみると、中山や胡地、燕、代、雲中、九原方面のように秦国から離れた地域の記事が存在する。それらはさらに恵文王時代の記事によって列挙すれば、①3年の「帰還して論功交渉し、大赦を行ない、祝宴を設け、会飲すること五日に及んだ。」②5年の燕記事、③8年の築城、④15年の燕昭王との会見、⑤21年、27年の河川工事、⑥22年の大疫、などである。これらは秦本紀や六国年表にはみられない記事である。このように秦国からは知りにくい記事が、趙世家にはほぼ毎年のように見られるということは、『史記』では『秦記』にもとづく六国年表などのほかに、もう一つ趙紀年の存在を想定しなくてはならないであろう。」と。この『史記』で用いられたと推測する趙紀年について、藤田氏は、「『史記』趙世家の史料的性格」（愛媛大学教養部紀要、第22号、1989年）のなかで、焚書をまぬがれえた理由について推測していた。それは、始皇帝である秦王政が、幼少の頃趙政と名乗っていたことなどから、母方は邯鄲の趙氏と関係があり、趙の邯鄲の記録だけは間接的に秦国にかかわる資料とみなされ、趙敬侯以降の邯鄲時代の記録が保存され、焚書をまぬがれて、漢代に伝えられることになったのではないかというものであった。ここでは、理由の推測について簡単に述べたが、藤田氏の論文では、資料を一つ一つ丹念に取り上げ、それらを分析しており、この推測を裏付けるものは十分にあるように感じた。

この趙紀年について、筆者の考えは、まず趙紀年の存在であるが、『史記』趙世家を検討してみて、趙敬侯以降に趙世家独自の戦国記事が書かれていることは明白なので、藤田氏と同じように趙紀年は存在したと考える。また、他の戦国諸侯や趙世家の前半部分に独自の戦国紀年がなく『秦記』によって構成されたのに対して、趙敬侯期以降だけ趙紀年が存在した理由についても、その区切りが趙が邯鄲に都する時期と一致することから、藤田氏の秦王政と邯鄲との深い関係によって、邯鄲に関する趙紀年が焚書からのがれえたという説は、納得のいく、有力なものであると考える。

次に、趙世家の史料性格について藤田氏はこう述べている。「『史記』趙世家では、系譜や『左伝』、六国趙表、戦国趙紀年、戦国故事などの複雑な構成をもっており、その大半は先行する資料を編集したものとみなしてきた。そのなかで趙敬侯元年以降の部分は、邯鄲の戦国紀年が利用され、その戦国紀年の間に先行する戦国故事が配列されていることになる。そこで問題となるのは、戦国趙紀年の信頼性である。これについては、今後さらに『秦記』によるという秦紀年との誤差を修正し、また『史記』戦国紀年の全体において書写の誤りを考証することによって、比較的信頼できる趙紀年とすることができるとおもわれる。」このような、趙世家の史料性格に関する分析は、私がスポットをあてようと考えている武靈王の時代についても行なわなければならない。武靈王の時代の『史記』の記述には、『戦国策』趙策二にある胡服騎射をめぐる議論の戦国故事があり、また、藤田氏の言う趙紀年によると思われる記事が多くある。この記事と戦国故事の一つ一つの史料性格を見つめなおすことが必要であると思う。

つぎに戦国時代の趙の研究を行なう場合、文献史料の検討の他に、出土文物や遺跡報告を利用した考察が必要であろう。ここで筆者が注目したいものとして、中山国についての考察があげられる。武靈王の時代の趙国では、主要な関心が中山国をめぐる北方に集中している。このことは、胡服騎射をめぐる議論の戦国故事や、中山国や北方に関する記事が多いことから窺える。このことから、その時代の主要な関心事である中山国をめぐる北方について考察することが、この時代を考える上で重要であると考えられるわけである。

戦国の中山国の創始者である中山武公は、紀元前414年に即位し、都を顧（河北省定県）においたことが『史記』などの文献に見える。ただまもなく魏の侵攻を受けて、前406年には国を失い、その故地は魏の太子たちの封地となった。その子の桓公は、中山国を復興し、その都は靈寿に置かれた。前380年ごろのことであろう。前377年には、房子で趙と戦った。この桓公のあとを継いだ成公が、前323年に燕、韓、趙、魏と共に王号を称した中山君であったと考えられる。前305年ごろ趙の中山に対する侵攻は激しくなり、前296年中山国王尚の時、趙の武靈王が中山国を滅ぼし、尚は膚施に移住させられた。

以上が大まかな中山国の歴史であるが、戦国時期の中山国に関する発掘報告とその

考証に関しては、河北省文物管理处「河北省平山県戦国時期中山国墓葬発掘簡報」（『文物』1979-1期）や、小南一郎「中山王陵三器銘とその時代背景」（林巳奈夫編『戦国時代の出土文物の研究』所収、同朋舎、1985年）があるので、考察したい。

もうひとつ出土文物を使って明らかにしておきたいことは、趙都邯鄲の都市の性格である。藤田氏が邯鄲に関する趙紀年が秦の焚書を免れて漢代に残されたと推測したことから、武靈王の時代も都であった邯鄲の都市の性格に興味を抱いたからである。他の戦国諸国の都、とくに同じ晋国から分かれた韓・魏の都との違いを考察したいと考えている。邯鄲に関しては、河北省文管処、邯鄲地区文保所等「河北邯鄲趙王陵」（『考古』1982-6期）や、河北省文物管理处・邯鄲市文物保管所「趙都邯鄲故城調査報告」（『考古学集刊』四、1984年）の出土報告があり、考証としては、江村治樹「戦国新出土文字資料概述」（『戦国時代の出土文物の研究』所収、同朋舎、1985年）があげられるので、考察したい。

以上戦国趙の特に武靈王の時代について、課題を述べてきた。筆者の学習不足のため、誤った理解があったことと思う。また、考察についても不十分であり、これからの研究の視点を述べたにすぎない。諸先生方の御指導や御助言を仰ぎたい。筆者がポイントと考えた武靈王の時代に焦点をあて、ひいては、戦国趙の国家のその時代における歴史像がつかめるところまで研究が深められれば、と考えている。